

アメリカザリガニ防除の必要性と効果的手法

NPO 法人シナイモツゴ郷の会 久保田龍二・高橋清孝・長谷川政智

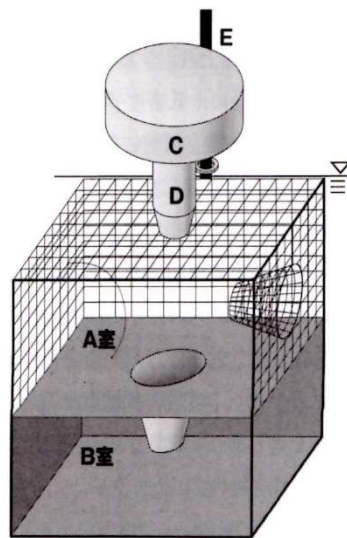
1 アメリカザリガニ防除の必要性

アメリカザリガニ(*Procambarus clarkii*)が侵入し繁殖したため池では水草が全て食べ尽くされ、トンボ類幼虫やゲンゴロウなど水生昆虫が減少あるいは全滅する事例が多発している。当会が希少淡水魚の保全活動を行っている宮城県大崎市の旧品井沼周辺ため池群のため池の一つでは二枚貝のタガイが捕食されて減少した結果、ゼニタナゴが全滅する事態に陥った。魚類資源を保全するためにはオオクチバスの駆除が極めて効果的であり必須であるものの、バス駆除を今後も継続するためにはアメリカザリガニなど侵略的外来種を含めた総合的防除と真剣に取り組まなければならない段階に入っている。

2 アメリカザリガニ防除の効果的手法

1) 捕獲技術の開発

アメリカザリガニは①食欲が極めて旺盛、②移動能力が高い、③危険を察知すると暗い場所へ逃げる、という習性があり、これを利用することにより効率的で効果的な捕獲として連続捕獲装置の開発に取り組んでいる。明暗2室からなるトラップを作成し、明室に自動給餌機でコイ養殖餌を1日10~50g投与してアメリカザリガニを誘引し、侵入後に暗室へ収容する装置を開発した。1週間に1回の回収で80~200尾の成体と大型幼体を捕獲できる。



- A室 捕獲部:**プラスチック製小型コンテナ
●食欲旺盛なアメリカザリガニの習性を利用し餌で誘引、アメリカザリガニは右側面の入口から侵入する。入口の先端部分を狭くし底部から離すことにより脱出を抑制している。
- B室 回収部:**遮光用プラスチックネットで覆ったコンテナ
●暗い場所を好むアメリカザリガニの習性を利用し捕獲部A室から回収部B室へ移動を促す。A室で餌が無くなるとA室下面の出口からB室へ移動する。出口先端を狭くしてA室への移動を阻止している。
- C 自動給餌器**
●餌を毎日自動的に投下。量(10~50g)と時間をプログラムできる。
●防水仕様のプラスチック容器内に設置。
- D 給餌用ダクト**
●給餌器から捕獲部へ餌を落とす。
- E 支柱と架台**
●自動給餌器を水面上に保つ。

図1 アメリカザリガニ連続捕獲装置

2) 効果的な防除手法

試験池では 2014～2015 年の 4～10 月にアナゴカゴ、2016 年には連続捕獲装置を用いてアメリカザリガニの駆除を毎週行った。ピーターセン法により生息個体を推定した結果、年間捕獲率は 0.9 前後と推定された。2014 年にはアメリカザリガニに攻撃されたタガイ幼貝や捕食後の貝殻が多数観察され、頻繁に捕食されていると考えられた。しかし、2015 年に捕食は認められなくなり、夏から秋にタガイの稚幼貝が大量発生した。

一方、試験池における小型幼体の捕獲試験では柴漬け(人工藻)や三角網の採捕が有効だった。しかし、繁殖期の卵や稚ザリを抱いた雌を捕獲する技術はまだ確立されていないので、今後、巣穴への移動および巣穴からの脱出行動を良く調べ、営巣阻止や親ザリの駆除など効果的な対策を検討する必要がある。小型幼体の捕獲や営巣阻止などによる繁殖阻止を実施することにより全成長段階における低密度管理が可能になると考えられる。さらに、新たな侵入が予測される水域では、水路と陸上の両面で侵入防止策を講じる必要がある。

① 連続捕獲装置による成体(大型個体)を主とした駆除

連続捕獲装置では成体など主に大型個体を主体に捕獲する(図 1 参照)。

② 柴漬け(人工藻)による小型個体の駆除

連続捕獲装置などのトラップでは大型個体が入ると、幼体などの小型個体が入りづらい傾向があるので、柴漬けや人工藻などにより小型個体を捕獲する(図 2 参照)。

③ 巣穴にいる繁殖個体の駆除

夏季から秋季にかけては、産卵のために巣穴の中に入ることから、巣穴にいる繁殖つがいや抱卵個体を捕獲する(図 3 参照)。

④ 定置網による侵入個体の駆除

生息池の排水路などからの侵入を防止するため定置網などにより捕獲する(図 4 参照)。



図 2 柴漬け



図 3 巣穴駆除



図 4 定置網(改良型)